

二次元時間の可能性

森田邦久

九州大学基幹教育院

時間的に並んだ出来事の系列上を「現在」が次々と動いていくというイメージは、私たちが素朴にもつ時間経過のイメージである。いわゆる「動くスポットライト説」である。しかし、この考えかたにはいくつかの問題点がある。まず、上のイメージは、「次々と」「動いていく」というようにすでに時間経過を前提としている。二次元目の時間を設定してもこの問題は解決できない。また、どの時点が「現在」であるかが世界に対して何の影響も与えないという点も問題であろう。たとえば、私が存在するあらゆる時点で私はその時点を「現在だ」と意識するだろう。しかし、前述のようにどの時点が現在であるかは世界に影響を与えないので、青山（2010）が指摘するように、どれが＜本当の現在＞なのかを知るすべはない。

以上の議論は、古典力学を前提とした時はもっともらしいが、量子力学まで考慮すると、どの時点が＜本当の現在＞であるかによって世界がどのようにあるかに影響を与えるように思える。本発表では、量子力学を前提としたときに、「動くスポットライト説」が擁護可能であるのかを二次元時間の可能性も考慮しつつ、議論する（結論としては擁護できない）。

青山拓央（2010）「様相と指標の累進」、永井均・入不二基義・上野修・青山拓央著『＜私＞の哲学を哲学する』所収、160-192 頁、講談社。